大阪府貝塚市北町方言における身体感覚を表すオノマトペ

岸江信介

はじめに

1．調査対象地：　大阪府貝塚市北町は、大阪市から南海電鉄の快速で約４０分、南海貝塚市駅から徒歩５分のところにある。貝塚市の旧市街地である。商家が多い。貝塚市の人口は、７９，６２１人（平成3年11月30日現在）、北町は、１，７５９人、戸数５８３戸（同上）である。

2．調査年月日：　平成３年８月２８日午後２時～午後４時

3．話者：　岡本喜久子氏（昭和２年１２月６日生）。他に南川孝司氏（昭和２４年１月２４日生）・谷口和代氏（昭和２２年１１月１１日生）。

4．調査者・調査場所：岸江信介、話者自宅（岡本喜久子宅）（貝塚市北町24－17 ）

5．調査方法・調査時の様子：　調査票に基づく質問法で行った。岡本喜久子氏の他、同じ貝塚市北町生まれの４０歳代話者２名（男女）の方々にも同席して戴いた。

I　全身の感覚

1－1．快不快　「サ˥ッパリ、「ス˥ット、サラサ「ラ

【説明】

「サ˥ッパリは、例えば風呂上がりの時、疲れがとれた時など。

「ス˥ットは、ほぼ全身の不快感から解放された折、用いる。

サラサ「ラは、皮膚、身体がさっぱりした時に使用する。

○　エー　「アンバ˥イニ　「ス˥ット　シ˥タ．（老）

（うまい具合に、すっとした。）

○　（風呂に入って、身体が）サラサ「ラニ　ナッ「タ．（老）

（さらさらになった。）

1－2．寒さ　「ガ˥タガタ（強）、「ブ˥ルブル（中）、「ゾ˥クゾク（弱）

【説明】

３語形とも、寒さに震える場合に用いる。

○　「ゾ˥クゾク　「シテキ˥タ　ワ．（老・若）

（ぞくぞくしてきたよ。）

1－3．熱さ　「ポ˥カポカ、「カ˥ッカ

【説明】

熱さの場合、オノマトペを用いることよりも、

○ 「ホテッテ˥タ ヨ˥ー。（老）

（熱くなってきたよ。）と表現することが普通である。上記、二語の共通語形を調査時に提示したら、使うということであった。

〔項目に関するコメント〕

ここでの方言形は、共通語形とほぼ同じ形式のものを使っているといってよい。ただ、1－1．のサラサ「ラ（サラサラ「ニ˥ ナル）が特徴的なものといえるだろうか。

II 皮膚の感覚 「ヒ˥リヒリ、「ベ˥タベタ、「ム˥ズムズ、「カ˥サカサ、ガサガ「サ、「ス˥ベスベ、「ツ˥ルツル、「ビ˥リビリ、「ズ˥キン「ズ˥キン、「ズ˥ッキン「ズ˥ッキン、「ポ˥タポタ「ジ˥ンジン

【説明】

切り傷の場合、ヒ˥リヒリ（多）、「ビ˥リビリ（稀）。

傷が痛む時の「ズ˥ッキン「ズ˥ッキンは、「ズ˥キン「ズ˥キンよりも痛み方が強い。促音添加による強調形である。頭部の項参照。

特徴のある表現文例を一つ掲げる。

○ ポタポタ「ニ˥ナッター 「ウ˥ミ デ「ラ。（中・男）

（ぽとぽとになったら、膿みがでるわ。）

寒さで、手のひら、足等が痛くなり、「ジ˥ンジン スルという。意味的には、共通語の「ずきずき」に近いか。

○ 「ジ˥ンジン クル 「ナ˥ー。（老）

（じんじん来るねえ。）

〔項目に関するコメント〕

共通語形と同形の形式は、ほぼ意味も共通語に近いものとみなしてよい。

III 頭部の感覚

3－1．頭 「ズ˥ッキン「ズ˥ッキン、「ガ˥ンガン、「ク˥ラクラ、「フ˥ラフラ

【説明】

意味も、ほぼ共通語と同じ。

○ タチクラミノ 「ヒ˥トヤッタ˥ー 「ク˥ラクラ スルト 「ユー ナ˥ー。（老）

（立ちくらみの人だったら、クラクラするねえ。）

○ ア「タ˥マ 「ガ˥ンガン スル。 （老）

（頭ががんがんする。）

3－2．顔面 「カ˥ッカ、「ポ˥ット

【説明】

ポットは、腹を立てたり、のぼせたりした時に用いる。

○ （長風呂で）「ノ↑ポシテ 「カ↑ッカ スル。（老）

（のぼせて、かっかする。）

○ 「ハ↑ラ タテ↑タ 「ト↑キトカ 「ポ↑ット 「スル。ジョ

ー「キ スル↑テ 「ユー↑ ン カ「ナ↑ー。（老）

（腹を立てた時にぽっとする。上気［のぼせること］するって言うのかねえ。）

3－3．目　「チ↑カチカ、ショボショ「ボ、「コ↑ロコロ

【説明】

逆睫毛で目が痛い時、「チ↑カチカスルという。「コ↑ロコロは、目にゴミが入った場合の表現。

○ メ「ー 「コ↑ロコロ シテ 「イ↑タイ ワ。（老）

（目がごろごろして痛いわ。）

3－4．耳　「ピーン↑ト、「ガ↑ンガン、「ガ↑ーン、ジクジ「ク、カサカ「サ

【説明】

急激に強い音を感じた時、「ピーン↑トスルという。騒音など、耳が「ガ↑ンガンシテ ウル↑サイという。

後二者は、耳垢の状態を言う時のオノマトペ。ジクジ「ク（湿り）、カサカ「サ（乾燥）。

○ 「ミ↑ミ ジクジク「ニ↑ ナッテ「ル↑ デ「ー。（老）

（耳の中がじくじくになってるよ。）

3－5．鼻　ム「ズ↑ムズ、グジュグ「ジュ、「ジュ↑クジュク、「ツーン↑ト

【説明】

共通語形の「ぐじゅぐじゅ」よりも「ジュ↑クジュクの方が当地では一般的に用いる。

○ 「ハナガ ハシカ↑テ ム「ズ↑ムズ 「スル。（老）

（鼻がかゆくてむずむずする。）

○ 「ハナ ジュ↑クジュク 「スル。（中）

（鼻がぐじゅぐじゅする。）

3－6．口

（口全体）　「ネ↑チャネ↑チャ、「ネ↑バネバ、ネトネ「ト

【説明】

特徴的なのは、甘さに対する表現である。

○ 「モノスオ↑イ 「ア↑マイ モ↑ン ヤッタ↑ー ア「ト

「クチ 「ネ↑バネバ 「スル↑ ワ。（中）

（もの凄い甘い物だったら、あとで、口がネバネバするよ。）

○ 「クチガ　アマッタルイ　「カンジノ　トキ　ネト「ネトヤ。（中）

（口が甘く感じる時、ネトネトだ。）

（歯）　「ガタガタ、ガ「クガク、ガッ「クガック、「カチカチ、「ズッキンズッキン(強)、「ズキズキ(中)、「チクチク(弱)

【説明】

「ガタガタは、共通語の「がちがち」に対応する形式。「ズキズキ以下は、歯が痛い時の表現。（　）内は痛みの程度。

○ （寒さで）「ハー　ガタガ「タジョ。（老）

（歯ががちがちだよ。）

（舌）　「ピリピリ

【説明】

共通語「ひりひり」は使用しない。

○ イ「チジクナンカー　タベタラ　「ヒタ　サスミタイ　ナルテ　「ユー　ンヤ。　※「ピリピリの説明で。

（いちじくなんかを食べたら舌刺すみたいになるって言うのよ。）

〔項目に関するコメント〕

当地の特徴的な形式としては、チ「カチカ・「コロコロ（目）、「ジュクジュク（鼻）・「ネバネバ・ネトネ「ト（以上、口全体）、ガタガ「タ・ガッ「クガック・「チクチク（以上、歯）等である。

3－7．喉　「カラカラ、「ヒリヒリ、「ガサガサ（ガサガ「サとも）ヒュ「ンヒュン、「ゴロゴロ（ゴ「ロゴロとも）

【説明】

喉が渇いた時「カラカラ、風邪をひいて喉が「ガサガサしてくると、「ゴロゴロ鳴り出すこともある。喉がヒュ「ンヒュン鳴るのは、喘息患者に多い。

〔項目に関するコメント〕

「ガサガサ、「ゴロゴロのアクセントは、それぞれガサガ「サ、ゴ「ロゴロとなる。前二者のタイプ（頭高型）よりも、後二者のアクセントの方が老年層に多い。全般的に、当地のオノマトペのアクセントは頭高型と、2型（下降が2拍目にある）・低起無下降型で対立する場合が多い。このような場合も、後者の方が在地的で、古いアクセントである場合が多い。

Ⅳ　胴体の感覚

4－1　肩　「コリコリ（少）、バンバ「ン、キンキ「ン、キン「キ

【説明】

バンバ「ン、キンキ「ンは、どちらも肩が凝った状態を言う。前者は肩全体、後者は筋（従って、肩以外の部分も言うことがある）が張った状態。キンキ「ンは、キン「キともなる。

○ カ「タ↑ コッ「テ↑ バンバ「ン↑ヤ 「ナ↑ー。（中）
（肩が凝ってばんばんだねえ。）

○（肩が）キンキンニ 「ハッテラ。（老）
（キンキンに張ってるよ。）

○ 「スジガハ↑ッテ キン「キ↑ヤ ナ↑ー。（中）
（筋が張ってキンキンだねえ。）

4－2 胸　　ド「キ↑ドキ、ドッ「キ↑ンドッ「キ↑ン、「ギュ↑ット、「キュ↑ット、「ム↑カムカ

【説明】

ほとんど共通語の枠組みと同じとしてよい。「ギュ↑ットと「キュ↑ットとの違いは、話者の説明によると、

○ 「ギュ↑ット シメツケラレ「ル↑ ホー↑ガ フカミ「ガ↑アル 「ナ↑ー。（老）
（ぎゅっと締めつけられる方が深みがあるねえ。）

4－3 腹

（空腹）　　「グ↑ーグー（若）、「ク↑ークー（老）

【説明】

両者は、その使用に老若対立がある。老年層話者の文例を掲げる。

○ （腹が）「ク↑ークー 「ナッテル↑ ワ。（老）
（クークー 鳴っているわ。）

（満腹）　　チャップ「ン↑チャップン、「バンバン

【説明】

チャップ「ン↑チャップンはお茶を飲み過ぎた場合。

（腹下し）　　「ゴ↑ロゴロ、「ク↑ルクル、「ビッビー、「ビッビ

【説明】

いずれも腹の鳴る音。

○ （下痢で） オナカ 「ビッビー ナッテル↑ ワ。（老）
（お腹がビービーなっているよ。）

（その他）　　タプタ「プ

【説明】

太って腹が出た状態を言う。満腹時には使用しない。

4－4　胃　　「シ˥クシク、「チ˥クチク、「キ˥リキリ（強）

【説明】

ほぼ共通語の場合と同じ。

○　「イーガ　キ˥リキリ　スル˥　ワ。「ヒチテンバットーノ　クルシミ˥ジョ。（老）

（胃がきりきりするわ。七転八倒の苦しみだよ。）

4－5　尻　　「ム˥ズムズ

【説明】

ほぼ共通語の場合と同じ。話者の説明を添える。

○　オ「シ˥リガ　「スワラン˥ト　「ユー　ト˥キ。（老）

（尻がすわらないという時。）

落ち着かないということを言ったものと思われる。

〔項目に関するコメント〕

共通語の場合とほぼ似た方言形が多いが、促音、長音を脱落させた変形した形態も目立つ。キン「キ、「ビッビ等。

V　手足の感覚

（手）　　「ブ˥ルブル、「ジ˥ンジン

【説明】

「ジ˥ンジンは、痛さをいったもの。☞「II　皮膚の感覚」参照。

（足）　　「ガ˥クガク

【説明】

足というよりも膝についていう場合が多い。

○　「ヒザガ　ガ˥クガク　「スル。（老）

（膝ががくがくする。）

○　「サラガ　ワ˥ロテ　「ガ˥クガク　「スル。（老）

（［膝の］皿が笑ってがくがくする。）

「サラガ　ワラウは、膝に力が入らなくなった状態を言う。

（その他）　「ヌ˥ルヌル、ヌ「ル˥ット

【説明】

足に触れた時の、その感触をいう場合。共通語と同じ。

〔項目に関するコメント〕

特に取り立てるオノマトペはないが、【説明】でも示した「ガ˥クガクは、膝の場合にいうことが多い。形態的には同じであっても、部位や感覚が微妙に異なる一例である。

（きしえしんすけ　大阪市立西第二商業高等学校）